

日本列島における先史・古代武器の進化と退化

松 木 武 彦

はじめに

武器の「進化」のみならず、「退化」も視点に含めてその変遷を分析するという試みは、少なくとも考古学においては、従来ほとんどなされたことがなかった。その理由は、これまでの日本考古学やその基盤にある戦後歴史学のコンセプトが、すべからく社会「発展」という一方向のベクトルないし単一の「評価基準」によって過去の社会変化を理解するという、ある意味では一面的な視座にほぼ終始してきたことによる。武器という一つの道具の変遷を追う際の見方もまたその視座に規定されて、機能の進化や発展の側面のみが析出され、退化や停滞といった側面は、あまり重視されてこなかった。小論では、こうした後ろ向きな営力も考慮に入れながら、主として日本列島中央部における弥生～古墳時代の武器の変遷を図式化し、それが社会変化のダイナミクスといかに関係していたのかという問題についても、予察を示したい

さて、考古学で対象とする武器の形態的側面に、どのような変化やしるしが現れた場合に、「進化」あるいは「退化」と評価できるだろうか。この問題は難しいが、さしあたり、次のように理解しておく。まず、武器の第一義的な機能が戦闘における殺傷能力にあるとすれば、それが向上する方向の変化を進化と捉えたい。たとえば、弓の場合は弓力（発射速度）の上昇、刀剣の場合は一定程度までの刃の伸長や強靱化がそれに相当しよう。これに対して退化は、殺傷能力とは無関係の、ないしはむしろそれを阻害する方向での変化、すなわち刃の矮小化や強靱さの後退、または肥大や装飾性の増大を指すことにする。肥大や装飾性の増大は、呪力的能力など武器の精神的側面での「威力」という点からみれば一種の発展とみられなくもないが、あくまでも実効的な殺傷能力の強化という物理的側面の進化とは対峙する方向と評価しておきたい。

武器に関するもう一つの側面として、ある種の武器の製作体制が充実し、規格的な量産が達成される場合がある。こうした状況は、一個の戦闘集団や軍事組織全体の能力を向上させるという意味で、個々の武器それぞれの機能増強はたとえ著しくなくとも、武器の進化の一形態と評価されよう。逆に、こうした製作体制が崩れ、規格性が緩んで生産量も低落する場合は、退化の一形態と理解することができる。

進化と退化という現象を、以上のような、個々の武器の機能、ならびに集団や組織を武装

させるための生産性や規格性という二つの位相から、時代を追ってあとづけてみよう。なお、ここで用いる武器の分類は、あくまでも列島に存在した可能性のあるもののみを対象とし、次のように定める。

攻撃用具	衝撃武器	〔短兵〕 剣（短剣・長剣）・刀（短刀・長刀）・鬮斧・棍棒 〔長兵〕 ヤリ・矛・戈
	投射武器	投ヤリ・弓矢（弓・矢柄・鏃）・弩・投弾
防御用具		楯・甲冑（馬用も含む）
指揮用具		指揮棒・楽器・旗
機動運搬用具		馬・船・車
その他付属具		矢筒（鞞・胡ろく）、鞆、など

これらのうち、鬮斧・棍棒・投ヤリ・弩・指揮棒・楽器・旗・船（軍船）・車は、確かに実在した形跡がないか微証程度であるが、可能性としてあげておくことにする。

1 武器の進化と退化の過程

実際の出土資料に基づいて武器の変遷をたどり、その進化と退化の過程を以下の四つの段階に分けて捉える。1期：弥生時代早期～中期，2期：弥生時代後期～末期，3期：古墳時代前期～中期，4期：古墳時代後期～末期。

(1) 1期：弥生時代早期～中期（紀元前5～4世紀から紀元前1世紀，図1）

朝鮮半島に由来する石製の短剣と鏃（弓矢）が主体の1-a期と、やはり朝鮮半島から伝播した青銅製の短剣・矛・戈がそれに加わる1-b期とに細分する。

1-a期（弥生時代早期～前期，紀元前5～4世紀から紀元前3～2世紀） 弥生早期（縄文晩期末）に朝鮮半島から伝わった水稻農耕文化複合の本格的第1波といわれる渡来要素の一つとして、有柄式磨製石剣（図1-1）・柳葉形磨製石鏃（同8）という武器の組み合わせが、北部九州を中心とした列島中央部西半に現れる。柳葉形磨製石鏃を装着した矢柄およびそれを発射した弓は、資料上は確定されていないが、後者については、佐賀県唐津市菜畑遺跡から出土した定形加工弓がその候補の一つとなろう（註1）。

菜畑の定形加工弓は、弓体の部分に応じて断面形状を調整加工することにより、発射時その反発力が無駄なく集中的に矢に伝わるようにしている点で、縄文時代の丸木弓よりも優れた機能をもつものと判断できる。また、この1期に、弓と弦を装着する方法が改善されたことも実際の弓の出土資料から明らかになっており（松木1985）、これも弓の機能に向上を

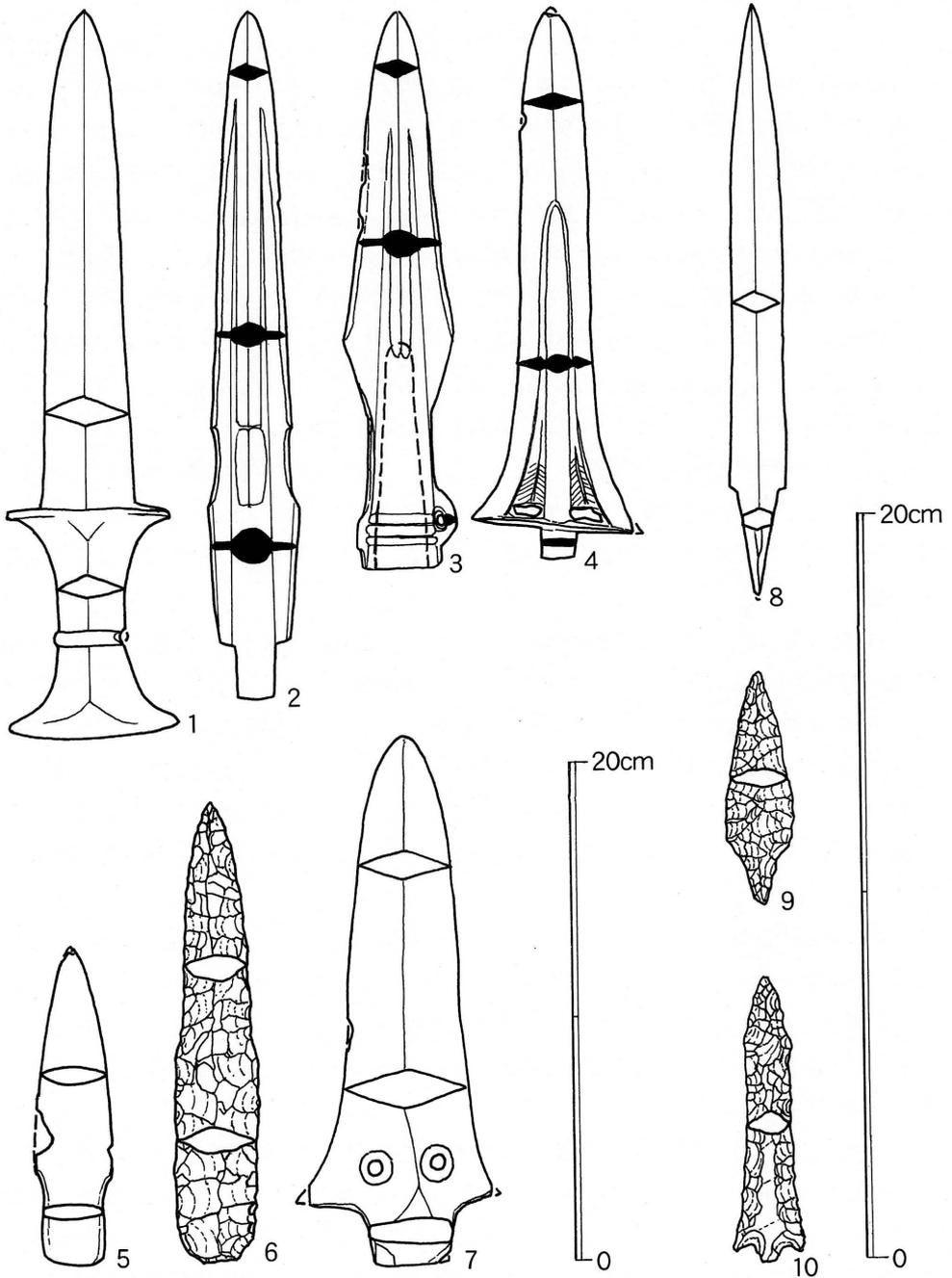


図1 1期の武器 (断面白抜きは石製、黒塗りは青銅製)

1 馬田上原 (福岡), 2・3 板付田端 (福岡), 4 水城 (福岡), 5 津古内畑 (福岡),
 6 和爾森本 (奈良), 7 馬場山 (福岡), 8 三雲 (福岡), 9 瓜生堂 (大阪), 10 朝日 (愛知)
 (各報告書・報文よりトレース)

もたらした可能性が高い。

このように、当期に弓の機能向上があったことは、定形加工弓と新たな着弦方法の出現からほぼ確実である。朝鮮半島由来の柳葉形磨製石鏃は在来の打製石鏃の5～10倍も重く、それを付けた当然大形であろう矢柄の重量も考えると、断定はできないが、そのような高い機能をもった新たな弓こそそれに適うものであったと想定されよう。この柳葉形磨製石鏃は、長大さと極度に鋭い先端角度、およびその整美さから、儀礼色の強い非実用品とする説もあるが、福岡県前原市新町遺跡の人骨嵌入例によって、実用品を含んでいたことが判明した。

その後、柳葉形磨製石鏃は、より量産に適した実用的な形へとやや変容しながら、東方の瀬戸内付近にまで分布を広げる。磨製石剣もまた、「鉄剣形」とよばれる厚手で簡素な形への比重を高めつつ、増加の傾向をたどる。次の1-b期にかけてその先端部が人骨に嵌入した例が散見されるようになることから、これらもまた実用品を含んでいたと考えられる。さらに、これらの磨製石鏃や磨製石剣は、波及した瀬戸内中部以東の地域でも在来の打製の技術で写し取られ、有茎式を中心とする大形の打製石鏃(図1-9・10)や打製石剣(同6)が生み出された(村田1998)。ただし、それらが武器として実用された程度は、資料上では明確でない。

1-b期(弥生時代前期末～中期末, 紀元前2～3世紀から紀元前1世紀) 弥生前期末には、朝鮮半島からの第2波の渡来要素として、青銅製の短剣(図1-2)・矛(同3)・戈(同4)の3種が北部九州を中心とした地域に現れ、まもなく列島内での生産が始まるとされる。これら青銅製武器は、人骨嵌入や折損・研ぎ直しの例(橋口1992)から、実用品を含んでいたことは疑いない。前の小期以来の磨製石剣にも人骨嵌入例があり、引き続いて多くが実用されていたと考えられる。青銅製の戈を写した磨製石戈も作られるが、実用された確証はまだない。

瀬戸内中部や近畿の打製石剣や大形打製石鏃は中期末にもっとも盛行し、打製石戈も現れる。大形打製石鏃は東海を中心とした中部でもみられる。打製石鏃には射込まれたと考えられる例がかなりあり、比率的にはやはり大形品が多いことから、それらを中心に対人用として使われた可能性が高い。武器としての実用を示す例はないが、東海や中部高地では大形の磨製石鏃が盛行する。

この小期には、鉄製の武器も定量的に現れる。短剣・短刀・矛・鏃で、量的には北部九州が他を大きく凌駕するが、短剣や鏃は散発的ながらも近畿付近にまで分布が広がる。鉄製武器は実用を示す証左に乏しいが(註2)、北部九州では鏃の人骨嵌入例がいくつかある。その他の武器としては、土製や石製の投弾や、木製の甲・楯といった防衛用具の存在が指摘される。また、鬮斧あるいは指揮棒としての役割が想定される環状石斧もしばしば認められるが、実際にそうした機能を帯びていたかどうかは実証されていない。

1期：小結 1期は、朝鮮半島から、北部九州を窓口として、すでにほぼ完成された武器やその体系が大きく2つの波をなして列島中央部に伝わり、定着した段階である。第1波で

は弓矢+短剣という組み合わせが、第2波ではそれに加えて長兵（矛・戈）が伝えられた。攻撃用武器の種類としては、古墳時代までの約1千年間でこの時期がもっとも豊富であることには注意すべきであろう。

これらの武器個々は、列島に流入後、とくに明確な機能的発達すなわち進化を示すわけではない。しかし、それらは実際に人に向けて用いられ、また、列島内各地に伝播して各地で在地的な武器（北部九州～近畿の鉄剣形磨製石剣、瀬戸内～近畿の打製石剣や大形打製石鏃など）が生み出される契機となり、それら在地的な武器もまた各地で実用されるなど、従来の縄文時代にはなかった「対人用武器」というツールのカテゴリーが列島各地で多様に発生し、醸成される源になった。そういう意味で、列島の武器史全体の中で総体的に捉えた場合、この時期は、武器の定着と進化の時期として評価することができよう。

(2) 2期：弥生時代後期～末期（紀元後1世紀～3世紀前半，図2）

この段階は、武器の変遷過程の上ではほぼ一つの時期としてまとめられる。この時期の特徴は、主として矛・戈といった長兵の衰滅に具現化される武器の種類の減少と、それと併行して進む武器の鉄器化である。

具体的に述べると、銅矛と銅戈とが異常に大形化して実用性を失い、完全に祭儀専用の道具と化して、実戦用武器のラインナップから外れる。これに対し、短剣は実用的な外形を保ったまま鉄で作られるようになり（図2-2，註3），末期には中部・関東といった東日本にまで分布を広げる。その一部はやりとして用いられたらしい。刃長が50cmを超えるような長剣（図2-3）も増える。鉄刀も前時期以上に目立ち、これがとくに多い北部九州や山陰・北陸では長刀

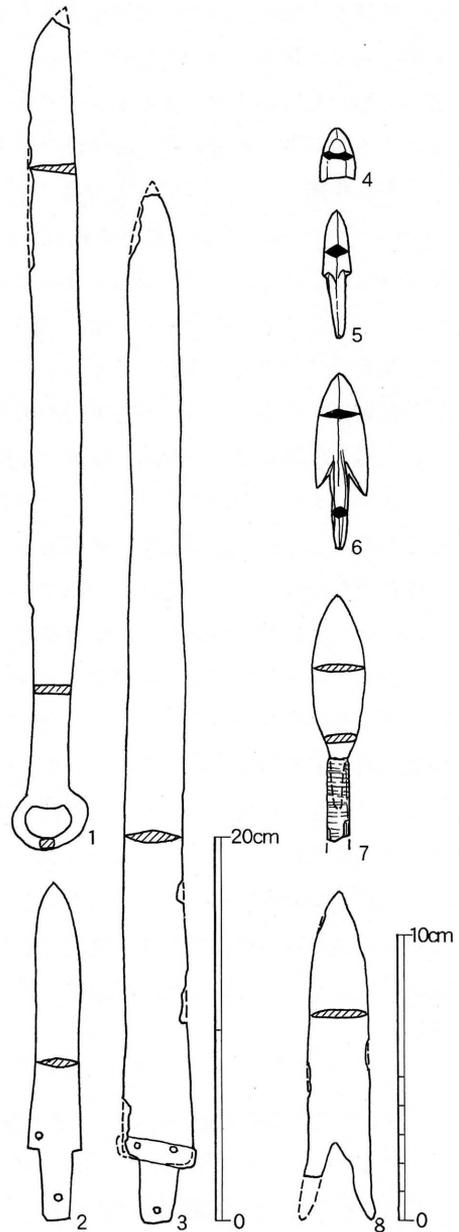


図2 2期の武器（断面黒塗りは青銅製，斜線は鉄製）

1 二塚山(佐賀)，2・3 有馬(群馬)，4 函石浜(京都)，5 大中の湖南(滋賀)，6 波来浜(島根)，7 二本木(大分)，8 小笹(福岡)
(各報告書・報文よりトレース)

も現れる。

弓矢の鏃も鉄器化が進み（図2-7・8）、後期後半には石鏃を凌ぐようになる。同時に、鏃に限ってはこの時期になって青銅製の実用的な製品が急増し（同4～6）、近畿東部の大和・近江から東海にかけては鉄鏃よりも量的比重が高い。その人骨嵌入例も確認されており、武器として実用されたことはほぼ疑いない。弓本体については情報が少なく、弩とされる木製品も知られているが、実用品かどうかという問題も含めて類例の蓄積が待たれよう。矢を受ける木製の楯、あるいは甲の例はこの段階に入って増加する。

2期：小結 このように、当時期には、前の段階に多様であった攻撃武器が、弓矢+短兵（刀剣）という組み合わせに単純化し、銅鏃を除いては、ほぼ鉄という単一の材料で作られるようになる。1期に矛・戈など多様であった長兵は、鉄製短剣と互換的に用いられる鉄やりとわずかな鉄矛のみとなり、全体的に下火である。すなわち、種類と材質という二つの面で、集約化、単純化が生じたということができよう。石や青銅に比べて強靱な鉄の使用は、剣の殺傷能力を高め、刃渡りの伸長や刀という武器の出現を可能ならしめた。そうした意味で、武器の鉄器化は、一般的には進化と評価できよう。

しかし、この時期の鉄器化は、武器のみならず、全般的な道具一般について認められることである。さらに、鉄製武器のうちもっとも普及する鉄剣をみると、北部九州産など機能的に優れたものもあるが、技術の低い東方の地域で作られたものなどを中心に、きわめて薄く、刃の焼きいれもしていない脆弱な製品もみられる。これらは実用の武器というよりも、ほとんどが副葬品として出土する事実などから、副葬用雛型ともいべき葬具や威信具であった可能性を指摘する意見もある（村上1998）。長剣や刀など、新たな機能的前進が窺えるものは数量面で主体的とはいえ、その多くは輸入品と考えられている（池淵1993、村上1998）。

以上のような状況を見ると、この段階における列島内の武器については、前段階にみられた定着と進化の動きが、そのままスムーズに引き継がれたものとは評価しがたい。鉄器化という前向きの流れはあるが、青銅製武器の肥大化と実用性の喪失、実用に耐えがたい雛型ともいべき鉄剣の増加などは、冒頭で示した基準に照らせば、むしろ「退化」の側面として捉えられよう。2期は、列島中央部の武器史の中では、そうした側面が強く表れた時期と評価できる。

(3) 3期：古墳時代前期～中期（3世紀後半～5世紀、図3）

この段階は、鉄製を中心として新たな武器が現れ、それぞれの武器に機能的な向上が認められる時期である。鉄製の甲冑が現れる3-a期、甲冑や鉄鏃の形態と生産体制が革新される3-b期、馬具や挂甲など新しい様式の武器が加わる3-c期という三つの小期に分ける。

3-a期（古墳時代前期、3世紀後半～4世紀中葉） 武器の完全な鉄器化を前提として、前段階の末期頃から、長刀の増加、新たな様式の鉄鏃の出現、鉄製冑の登場など、武器の革新を物語る新しい動きが段階的に認められるが、それまでにはなかった鉄製冑の登場が、そ

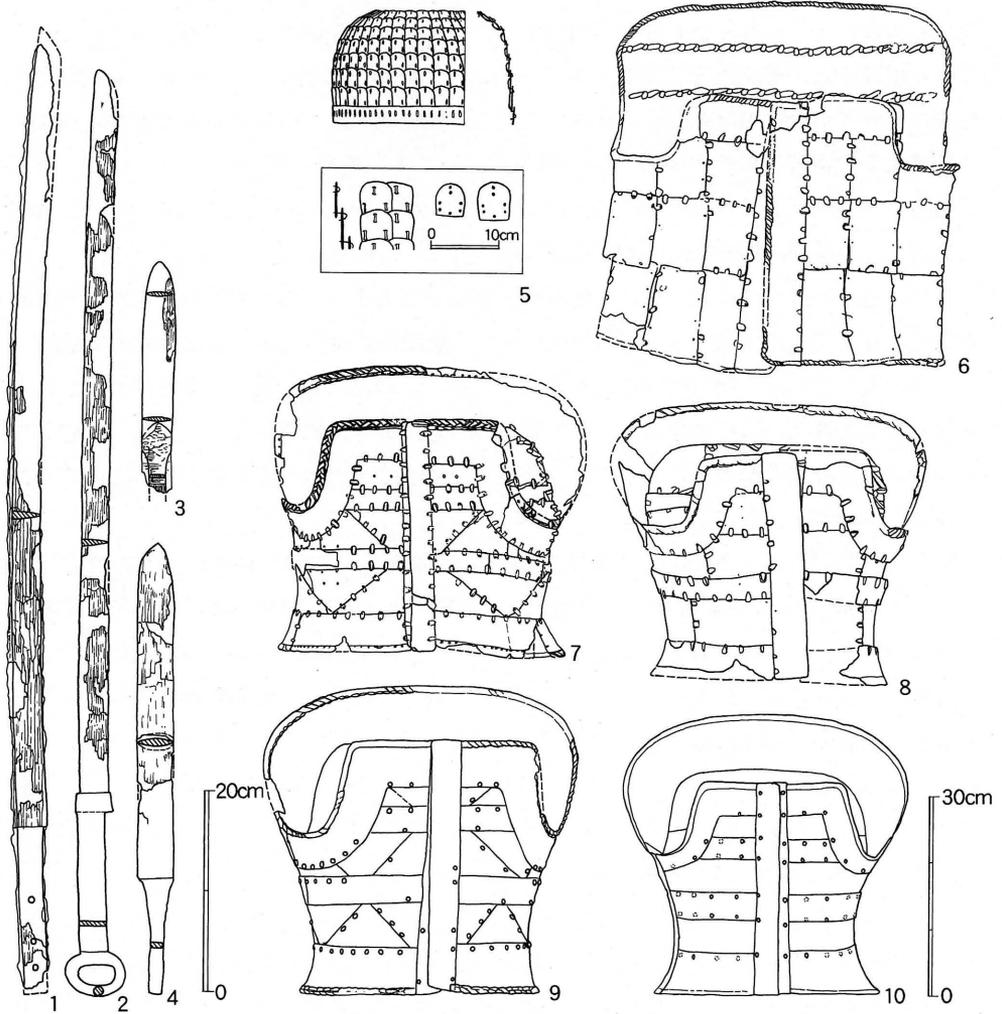


図3 3期の武器(すべて鉄製)

1 雪野山(滋賀), 2~5 椿井大塚山(京都), 6 園部垣内(京都), 7 老司(福岡), 8 豊中大塚(大阪),
9 随庵(岡山), 10 小木原3号(宮崎)
(各報告書・報文よりトレース)

の中でも大きなエポックであり、さらにそれがいわゆる定型化した前方後円墳の成立とほぼ軌を一にするとみられることから、これを画期とする古墳時代前期の始まりをもって3-a期の開始とする。

まず、この時期には、列島内の主だった首長墓の副葬品として長刀(図3-1・2)が普通にみられるようになり、しだいに増加する。当初は、素環頭をもつもの(同2)などを中心に、中国からの輸入品を相当数含んでいるようであり(岡村1999)、列島内での生産開始時期については今後の研究が待たれる。ただし、弥生時代以来の短剣も多く残り、首長墓への多量副葬や階層的低位の中小古墳の副葬品としては、短剣(図2-4)が主流を占める。短剣には長柄を付けてやりとして使用されたものが明らかに多くなり(同3, 菅谷1988)、長兵が、この段階に量的には比重を回復していることに注意したい。

次に、新しい様式の鉄鏃として、筆者が「有稜系」とよぶ小形・厚手の一群が、前段階の末から成立してくる(図4-5・6・12・14)。身部の断面形が矩形または菱形で強靱であり、茎部との間に段または明瞭な関が形成される。この段ないし関は、命中時の衝撃により鏃身下端が矢柄上端に陥没することで対象物への貫通力が減殺されることを防ぐための加工とみられる。身部の厚手化とともに、より堅固な対象物を射抜く力が向上する方向での機能的発達と評価できよう。

朝鮮半島では、同じ加工はすでに磨製石鏃の段階からみられ、鉄鏃にも及んでいる(図4-7)。鉄鏃におけるこの加工の普遍化が、朝鮮半島と日本列島のいずれで先行するののかについては今後の課題であるが、両地域が連動しつつ、上述のような鉄鏃の機能的発達を実現していることには注目されよう。ただし、日本列島では、この種の鉄鏃は美麗化の方向をたどり、良質の青銅や、やがては碧玉でも作られるようになって、「飾り矢」の意味が第一義的になったと考えられる(図4-4・11・13, 松木1996)。同時に、筆者が「平根系」とよぶ肥大化した鉄鏃(図4-1・2・8・9)も、儀器的性格のものとしてこの時期にもっとも盛行する。実用と考えられる鉄鏃は、弥生時代以来の小形扁平なものも多い(図4-3・10)。

鉄製甲冑は、まずこの小期の最初に、基本的に馬蹄形の鉄板を魚鱗状に革紐で綴じて成形した小札革綴冑(図3-5)が現れ、その系譜は中国に求められることが明らかにされている(橋本1999)。続いて、この小期の中頃から後半にかけて、帯状もしくはカルタ状の鉄板を革綴成形した縦矧板革綴短甲・方形板革綴短甲(図3-6)が現れる。朝鮮半島からの輸入品とみる考えがあったが、近年では列島産説も出ている(橋本1999)。現在のところ、この2種の短甲の出土例は20領程度であり、それぞれ個体差が大きいことから、列島産であったとしても、まだ組織的な量産体制が整っていなかった可能性が高い(野上1966)。なお、革や繊維などの有機質製の甲冑もあったらしい。

3-b期(古墳時代中期前半, 4世紀後葉~5世紀前葉) 長刀が急激に増加し、量的には短剣を逆転して、中小古墳にも普通にみられるようになる。資料面での確証はないが、そ

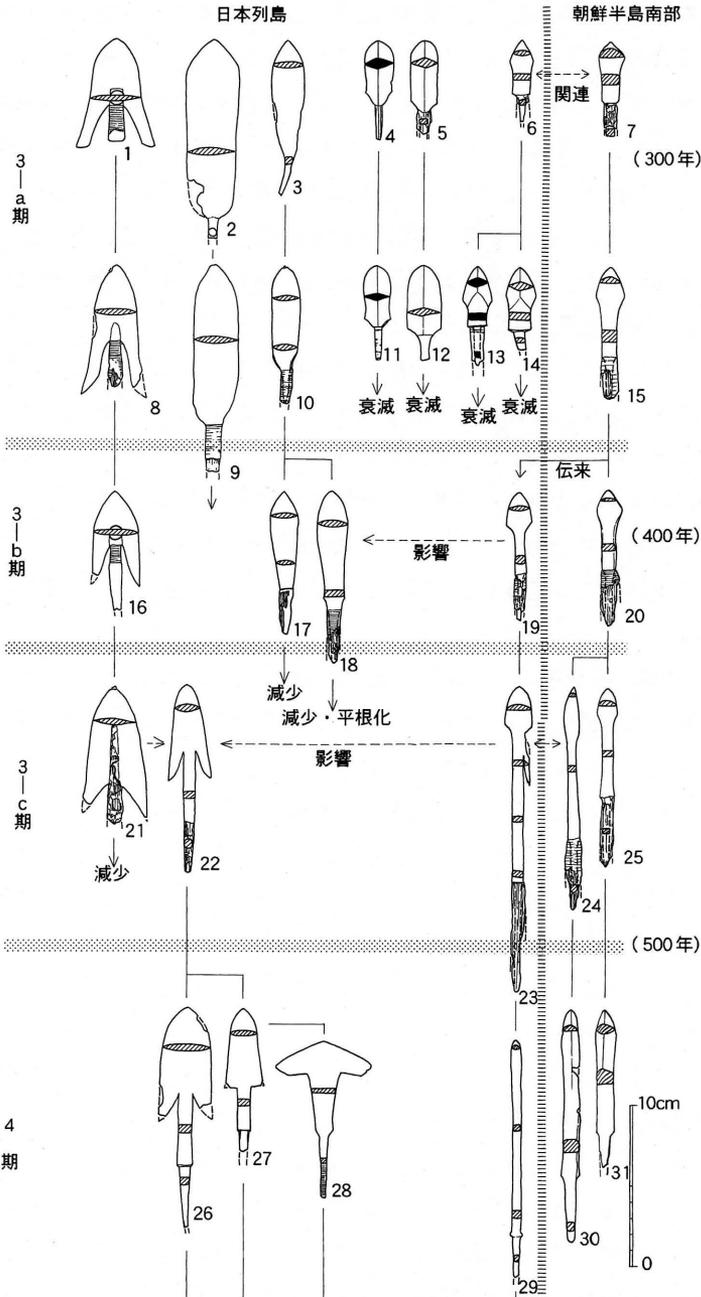


図4 3～4期における鏃の系統と変遷 (断面黒塗りは青銅製, 斜線は鉄製)

1・2 椿井大塚山(京都), 3 殿山9号(岡山), 4 浦間茶臼山(岡山), 5 権現山51号(兵庫), 6 弘住3号(広島), 7 禮安里93号(韓国), 8 山王寺大塚(栃木), 9 松林山(静岡), 10 園部垣内(京都), 11 メスリ山(奈良), 12 花光寺山(岡山), 13 妙見山(京都), 14 ハカリゴ-口(香川), 15 禮安里150号(韓国), 16・18 黄金塚(大阪), 17 金蔵山(岡山), 19 豊中大塚(大阪), 20 福泉洞21号(韓国), 21 野山・野山支群11号(奈良), 22 野山・池殿奥支群3号, 23 野中(大阪), 24・25 福泉洞10号(韓国), 26 石光山16号(奈良), 27 岩田14号(岡山), 28 山ノ前1号(福岡), 29 定北(岡山), 30・31 玉田M7号(韓国)
(各報告書・報文よりトレース, ただし23は杉山秀宏による)

のあり方からみて、生産の技術と体制が確立し、量産されるようになった可能性が高い。

鉄鏃は、角棒状の分厚い身部と、茎部との間の明瞭な段加工を特徴とする一群の中で、より実用的な形態となったものが現れ（図4-19）、前段階以来のそれが美麗化した一群や、弥生時代以来の扁平な一群に取って代わる。これらは、前の小期以来朝鮮半島で主流になっていたものであり（図4-15）、そこから伝播した一群と捉えられる（松木1991）。このことよって、鉄鏃は、前の小期に顕著な儀器色が薄まり、全体として大きく実用色を強めることになるのである。なお、青銅製や碧玉製の鏃が、この小期の始まりと前後して消滅することも、鏃全体の実用色を濃くすることにつながっている。

革新は鉄製甲冑にもみられる。前の小期に作られていた縦矧板革綴・方形板革綴の2型式の短甲は個体差が大きく、部材の形態なども統一されていなかったのに対し、この小期から現れる長方板革綴（図3-8）・三角板革綴（同7）の2型式の短甲は個体差がきわめて小さく、部材の形態も企画性がある。また、その数も、前の小期の2型式を大きく凌駕し、中小の古墳にも普通に認められるようになる（藤田1988）。同じ手法で作られた冑や頸甲・肩甲などの付属具も現れる。組織的な製作体制が確立し、量産が始まった可能性が強い（北野1962、野上1966ほか）。

3-c期（古墳時代中期後半、5世紀中葉～後葉） 長刀の優位と量産の体制が確立する。副葬用の儀器を含む可能性があるので注意を要するが、古墳によっては数百本を埋納する例がみられる。また、前の小期以前は断片的にしかみられなかった鉄矛が、この小期以降は増加の傾向をみせる。ただし、量的には長刀にはるかに及ばない。

鉄鏃は、角棒状の身部が長く伸びた長頸式とよばれるものに形態が統一される（図4-23）。この動きは、朝鮮半島でもほぼ同じ時期に認めることができ（同24、松木1999）、彼我の交流関係の中で生じた現象であったと考えられる。

鉄製甲冑は、前の小期に確立した部材の形態と画一性を踏襲しつつも、それらを鋳で綴じ合わせるという新しい手法が現れ、短甲においては横矧板鋳留短甲（図3-10）・三角板鋳留短甲（9）の2型式が成立する。この鋳留の技法は冑にも取り入れられ、細板鋳留衝角付冑・細板鋳留眉庇付冑・横矧板鋳留衝角付冑などが現れる。これらの甲冑は、依然として企画的な部材の組み合わせに加え、鋳留技法という新手法の採用により、前の小期以上に量産されたことが、その出土数からも明らかである。

3期：小結 この時期は、武器の鉄器化とその製作技法の向上という技術的前提を基礎として、長刀の普及と増加、鉄製甲冑の出現および改良・量産化、鉄鏃の革新とその完遂などといった、武器の機能面と生産面での革新が連続的に生じる。

当初の3-a期には、飾り矢の盛行など、機能的発達とは別方向の装飾化傾向が一部にみられるが、鉄製甲冑や長刀という新しい武器体系の浸透が始まり、3-b期には個々の武器の機能および生産体制という両面における著しい発達が認められ、3-c期にはほぼ完成される。こうした点から、3期は、列島の武器史上、進化の側面が顕著に表れた段階と、評価できよう。

なお、この時期の武器を進化させた新たな武器体系の導入や、形態・機能の革新について重要な点は、3-a期当初には中国からの影響により、3-a期の中途から3-b・c期を通じては朝鮮半島から影響を受けたりそこと連動したりしながら進展していることである。3期の武器が、こうした対外交流を一つの背景ないしは営力として進化したことに注意しておきたい。

(4) 4期：古墳時代後期～末期（6世紀～7世紀前半、
図5）

この段階は、前段階までに進化してきた武器の発達が停滞したり、生産体制が衰滅したりする一方で、馬具・挂甲・装飾付大刀という新たな武器の組み合わせが顕在化し、しだいに装飾性を強めていく時期である。武器史上は一つの時期として取り扱いたい。

まず、この段階の始まりを画期づけるのは、短甲の急激な衰滅である。この期以降に副葬されるものもあるが、数は少なく、生産自体は停止した可能性が高い。

短甲に代わって甲冑の主体となるのは、前段階に現れて漸増しつつあった挂甲である。元来は朝鮮半島から導入されたものであるが、この段階には列島内での生産が始まっていたと考えられているようである（清水1993）。一般に騎馬用の甲とされるが、そう特定するには機能面での疑義もある（註4）。前段階に短甲と共存していた当時には、短甲が比較的小規模な古墳からもあまねく出るのに対し、挂甲をもつのは前方後円墳など大形墳である場合が多かったことから（川西1983）、その出現の当初から、挂甲は短甲に比べて身分表象的ないしは威儀具的な色彩が強かったと認められよう。部品数や製作工程数から考えても、その製作コスト自体、短甲より大きかったと想定される。

馬具もまた前段階から現れ始めてはいるが、普遍化するはこの段階以降である。それらは、前段階の古式のものに比べて明らかに装飾性が高い。とくに鏡板・杏葉の装飾性の高さは東アジアでも出色の地域の

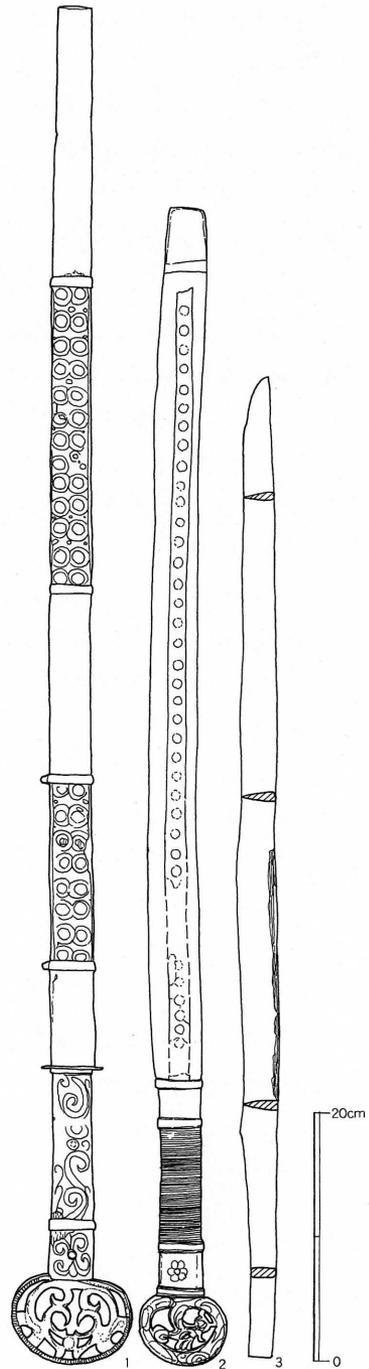


図5 4期の武器（すべて鉄製、一部金銅装）
1 大谷1号(岡山), 2 山王山(千葉),
3 ホリノラ4号(奈良)
(各報告書・報文よりトレース)

一つといえ、それらは騎乗用具というより、むしろ飾り馬の装具と捉えた方が適切といえよう。ただし、この時期の後半に当たる6世紀後半から7世紀にかけては、装飾性の少ない簡素な部品からなる馬具が、やや小規模な古墳の副葬品を中心に増加する。

長刀(図5-3)は、前時期に引き続き生産・副葬ともに続いていくようであるが、茎の形態などに細かい変化が指摘されるほかは(臼杵1984)、明確な機能向上を窺わせるような発達は認めがたい。そのいっぽう、把頭や鞘に透彫・象嵌などの精巧な細工を施し、各種の付属具をもった装飾付大刀(図5-1・2)が顕在化し、当時期後半の6世紀後半以降、増加が目立つ。朝鮮半島の意匠の影響を受けつつ、多くは列島内で生産されたと考えられている(新納1982)。実用よりも威儀具としての色彩が強いとみて大過あるまい。また、装飾付でない通有のものも含め、長刀の中に、片手では扱えないほど長大化したものが現れるが、これらについても威儀具としての性格を想定しておくべきであろう。

鉄鏃は、前期末の3-c期に、長頸式鉄鏃として、形態上一応の完成をみせたあと、この時期以後はとくに明確な機能的発達のしるしは示さない。むしろ、一般的に刃部の縮小と軽量化(尾上1993)、身部(頸部)と茎部間との段加工の簡略化など、むしろ機能的には後退といってもよい方向での変化が指摘できる(図4-29)。鉄鏃の中には、3-a期に顕在化した平根系の系譜を引く大形扁平の身部と刃部をもった一群(同26~28)があり、これが地域毎にさまざまな形態・意匠の特色をみせながら(杉山1988・尾上1993)、儀器的な鏃としてこの時期にもっとも発達する点にも注意される。

こうした鏃(矢)の儀器化傾向とともに、弓の装飾化も進んだらしく、飾り弓の装具に用いられたと考えられる両頭金具などが、しばしば認められる。その他、この時期に顕在化するものとして、身部の断面が三角形を呈する三角穂式鉄矛(高田1998)などがある。

4期：小結 この時期は、装飾付大刀・飾り馬具・飾り弓・挂甲など、きわめて装飾性の高い、ないしは威儀具的な武器の様式が、顕現する段階である。またその一方で、意匠性に富む鉄鏃や実用とはみなしがたい長大な刀など、在来の武器の一部にも儀器的色彩の強まりが認められる。前段階を通じて進んできた鉄鏃・刀などの一般実用武器は、この時期にはさしたる機能的発達をみせない。

以上のことから、この時期は、武器の実用的側面においては停滞ないし退化の方向が強まった段階と捉えられよう。

2. 武器の進化・退化と社会変化

(1) 列島中央部の社会変化プロセス

前章では、日本列島中央部における武器の変遷をあとづけ、その進化と退化のパターンを整理してみた。簡単にまとめておくと、日本列島に武器が現れる紀元前5~4世紀から紀元

前1世紀までの1期は進化、紀元後1世紀～3世紀前半の2期は退化、3世紀後半～5世紀の3期は進化、6世紀～7世紀前半の4期は退化というように、それぞれ評価できる。むろん、詳細にみれば、前章の具体的作業の中でも極力拾い上げたように、進化傾向の中で退化の様相を、あるいは退化過程の中で進化の様相を示す要素もあるし、それぞれの段階の境界が実際には画然と分かれず、過渡期のさまざまな具体的状況が細かく抽出できることは明白である。それを重々承知のうえで、きわめて巨視的に鳥瞰すれば、以上のような大きな脈動が浮かび上がるという意味である。

それでは、武器の進化と退化の以上のような脈動は、列島中央部の社会変化のプロセスとどのように関連しているであろうか。まず、列島の社会政治的变化を、農耕の本格的開始から律令国家形成に向けて、一定の社会編成が完成され保たれる静的な「安定期」と、それが弛緩し混乱してまた次段階の編成に向かう動的な「形成期」の周期的交代として捉えると、大まかに次のように整理できる。

紀元前5～4世紀（弥生時代早期）に列島に稲作農耕文化が伝えられた後、在来の文化との接触がもたらす多少の混乱は経るものの、おおむね紀元前3世紀頃（弥生時代前期後半）には東海付近までの各地域に農耕集団が形成される。以後、中期まで継続する拠点的な大形集落と周辺の中小集落というフォーメーションに具現化された地域社会が、セトルメントパターンをみる限りは各地とも安定して続き、その最後の段階に当たる紀元前1世紀の中期後葉には、近畿ではしばしば中心的建物を備えた大形環濠集落、北部九州では夥しい副葬品をもった厚葬墓など、地域ごとに独自の文化資本の蓄積をみせる。この段階（紀元前5～4世紀から紀元前1世紀）は上記の安定期と捉えられ、前章であとづけた武器の変遷過程では進化の段階として評価した1期にほぼ当たる。

紀元後1世紀に入ると、上記のフォーメーションは多くの地域で崩壊し、従来の文化資本も断絶したり放棄されたりする。それまでとは別の場所に大形集落が現れる地域もあるが、次の2世紀までを通じてみるとそれらの多くはあまり長く続かず、セトルメントパターンは総じて不安定である。そうした中から、3世紀の前半頃には、奈良県纏向遺跡を代表とするような、面的な広がりをもって人口が密集し、広域交流を示す他地域産の土器を多く出す新たなタイプの大形集落が、各地の枢要部に形成されてくる。文化資本についていえば、2世紀までは銅矛・銅戈・銅鐸などの青銅製祭器、あるいは地域ごとに多様な形をとる墳丘墓などが競争的に大形化するが、3世紀に入る頃には青銅製祭器は衰滅し、共通した形態と内容をもった墳丘墓が各地に現れる。集落や墳丘墓にみられるこのような状況は、次の古墳時代を準備した動きと捉えられよう。この段階（紀元後1世紀～3世紀前半）は、従来の編成が崩壊し、その混乱の中から次の編成が作り出されてくる形成期と評価できよう。武器の変遷過程では前章の2期、退化の様相が濃い段階に相当する。

3世紀後半からが、いわゆる定型化した前方後円墳によって具現化される古墳時代となる。次の4世紀に入ると東北南部まで前方後円墳が波及し、列島各地の集団の多くが一定の宗教

的合意のもとに相互の出自や立場を認識・承認しつつ共存していた状況が見て取れる。4世紀後葉から5世紀中葉には各地の前方後円墳は巨大化と凝集を示し、近畿中央部の河内地域（古市・百舌鳥古墳群）を一つの規範とした祭祀センター（古墳コンプレックス：松木1997）が主要各地に形成される。5世紀後葉になると、それまでは他の地方にもあった墳丘長200mを超える古墳が近畿中央部にしか営まれなくなる。文献史学の上では、大王を中心とする近畿勢力の諸地方勢力に対する優位が確立され、大王周辺の政治組織が一定の発展をみたとされるいわゆる雄略朝期にあたり、前方後円墳の出現によって始まった古墳時代的な社会編成の確立期と評価される。雄略朝期を確立期とするこの段階（3世紀後半～5世紀）は「前方後円墳体制」（都出1991）の拡充に具現された安定期と捉えられよう。武器の変遷過程では前章の3期に当たり、著しい進化の傾向をみせた段階である。

6世紀に入ると、前方後円墳の築造状況に大きな変化が生じ、近畿中央部や筑紫・尾張などのように大規模なものが単発的に築かれる地域、小規模なものが多数が分散的に造営される地域、まったく築かれない地域など、おそらく地域ごとの選択や流行による変異が現れる。このことは、横穴系墓室の浸透や副葬品の日常化などが示す古墳の社会的意味自体の変容とあいまって、前方後円墳を中核とする古墳の政治性が低下した状況の反映と捉えられよう。したがって、古墳の動向からじかに列島の社会政治的構造を復元することは難しくなるが、文献史学の研究からは、近畿と九州の盟主的首長どうしの戦い（磐井の乱または磐井戦争）や、近畿の盟主的首長（大王やその陪臣）の地位の不安定や勢力争いなどが生じた内乱の多い時期とされている。6世紀末～7世紀前葉のいわゆる推古朝期を国家形成の画期とみる考えもあるが、7世紀中葉以後も大王周辺の勢力争い、対外戦争での敗北（白村江の敗戦）、大王位（天皇位）をめぐる抗争（壬申の乱）、内外に起因する政治的混乱が相次いでいる。こうした点から、雄略朝期に一時確立された集権的な体制が崩れた6世紀から、天皇中心の宮廷・宮都と律令国家的支配秩序がほぼ確立された天武・持統朝期直前の壬申の乱前後までを、古代国家の最終的確立に向けての混乱をくぐる形成期と位置付けることができよう。武器の変遷過程の4期がこの中に含まれるが、退化の様相が濃い段階と評価される。

(2) 武器の進化・退化の脈動と社会変化の周期

以上に述べてきた、列島中央部の社会変化にみられる安定期と形成期の周期と、前章で把握した武器の進化・退化の脈動との関係を図示すれば、表のようになる。

ここで注意されるのは、静的な安定期には武器が進化の様相をみせ、動的な形成期には退化の様相を示すという傾向である。一般的に、形成期には次の社会編成を生み出すための武力による抗争や統合が盛んになるので、武器の機能的発達すなわち進化の側面がより強く認められると考えられるにもかかわらず、実際には逆の状況を示すことには注意しなければならない。このことは、そうした統合や編成といった求心的な動きを進行させる営力の源が、少なくとも日本列島においては、事実上の武力を行使することよりも、武力の象徴的側面を

表 日本列島中央部の社会変化と武器の進化・退化

年 代		前 300	1	250	400	500	600	700
本論での区分		1 期		2 期		3 期		4 期
		1・a / 1・b /		/ 3・a / 3・b / 3・c /				
セ ト ル メ ン ト パ タ ン	安定的様相	「池上曽根型」拠点集落網の形成と成熟			「纏向型」拠点集落網の形成			
	不安定的・過渡的様相	大形掘立柱建物			高地性集落消滅			
墓 制	安定的様相	甕棺墓群(九州) 集溝墓群(近畿など) 「王墓」(九州)			前方後円墳「秩序」→→→→→ → → →			
	不安定的・過渡的様相	甕棺墓群の衰滅(九州) 集溝墓の衰滅?(近畿) 密集集団墓から区画墓へ			前方後円墳空白域の出現 横穴式墓室の普及 前方後円墳消滅			
評 価		安定期 / 不安定期		安定期 / 不安定期		安定期 / 不安定期		
武 器 の 様 相	進化的様相	石製武器伝来 →在地的発達(近畿など)		青銅製武器伝来 鉄剣の普及 鉄刀(輸入?)→→→列島内量産開始? 鉄鏃の普及(九州→瀬戸内以東)→鉄鏃の改良→新型鉄鏃導入→確立 鉄製(甲?)冑伝来 →鉄製短甲普及→鉄製短甲・冑量産 挂甲導入→生産開始 馬具導入→生産開始				
	退化的様相	青銅製武器の肥大・祭器化		「雛型」様鉄製短剣 →? 「雛型」様鉄刀		装飾付大刀の盛行 儀仗的鉄鏃の盛行 短甲量産体制の停止 馬具装飾の極大		

誇示することに多く求められた可能性を示すものであろう。

逆に、武器の機能的進化の側面が、むしろ一つの社会編成が静的に保たれたようにみえる安定期に明確に認められることの意味も熟考しなければならない。静的であるように見えて、実際にはその表面上の安定を保つために実際の武力が必要とされた可能性もある。ただ、4～5世紀に当たる3期の武器の進化については、前章で具体的に述べたように、主として朝鮮半島南部との技術的接触、ないしはその武器との絶えざる影響関係が動力となっていたことは明確である。文字記録や文献の研究からは、この段階に、列島と朝鮮半島との間に軍事的接触を含む密接な交流関係があったとされるので、武器に表れた上記の事象は、そうした歴史的背景で理解することが許されよう。そうであるとすれば、この時期の列島内部の安定は、対外的な緊張関係によって保たれていたとみることもでき、その場合、観察される武器の進化は、主として対外的な緊張関係を営力として実現されたものと推測しうるのである。

いずれにしても、小論において武器の進化・退化と社会変化の過程に密接な相互関係があることが具体的に明らかになったことは一つの到達といえよう。ただ、その相互関係の内実は、上記のように、常識的な先験では理解しがたいことも確かといえる。このことは、武器のもつ意味がきわめて多面的であり、少なくとも機能と象徴の両面から、それが果たした複雑な社会的役割を解きほぐしていく必要性を示している。同時にまたそのことは、武器の分析が、より多面的で豊かな歴史叙述や社会変化過程の説明に有効であることをも物語っている。小論での作業がその一つのステップとなれば幸いである。

(註)

- (1) ただし厳密には、菜畑弓は「彎弓」ではなく、「半彎弓」とよぶべきであろう。
- (2) 石製や青銅製より粘りが強く、体内で折損してそのまま断片が残ることがほとんどないためと考えられる。
- (3) ただしそれは、石剣や銅剣の材質転換形態によって成立したものではなく、やはり形態は外部からもたらされたものと考えられる。
- (4) 大多数を占める胴丸式挂甲の場合、着用して騎乗すると草摺部分の前面と背面とが鞍または馬背の上面の高さまでめくれ上がるが、これにつれて左右両側面の草摺部分も同じ高さまでめくれ上がり、騎者の大腿部が露出してしまうことになる。なお、襦當式挂甲の場合はこの不都合は生じない。近藤好和氏のご教唆による。

(引用参考文献)

- 池淵俊一1993「鉄製武器に関する一考察——古墳時代前半期の刀剣類を中心にして——」『古代文化研究』第1号、島根県古代文化センター
- 白杵 勲1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号、古墳文化研究会
- 岡村秀典1999「漢帝国の世界戦略と武器輸出」福井勝義・春成秀爾編『戦いの進化と国家の生成』（人類にとって戦いとは1）、東洋書林

- 尾上元規1993「古墳時代鉄鏃の地域性——長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として——」『考古学研究』第40巻第1号
- 川西宏幸1983「中期畿内政権論」『考古学雑誌』第69巻第2号
- 北野耕平1962「中期古墳の副葬品とその技術史的意義」『近畿古文化論攻』奈良県立橿原考古学研究所
- 北野耕平1969「五世紀における甲冑出土古墳の諸問題」『考古学雑誌』第54巻第4号
- 清水和明1993「挂甲——製作技法の変遷からみた挂甲の生産」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』第1分冊，埋蔵文化財研究会第33回研究集会実行委員会
- 菅谷文則1975「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『橿原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』吉川弘文館
- 杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八，吉川弘文館
- 高田貫太1998「古墳時代鉄鏃の性格」『考古学研究』第45巻第1号
- 都出比呂志1991「日本古代の国家形成論序説——前方後円墳体制の提唱——」『日本史研究』343号
- 野上文助「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」『考古学研究』第14巻4号
- 新納 泉1982「单竜・单鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号
- 橋口達也1992「弥生時代の戦い——武器の折損・研ぎ直し——」『九州歴史資料館研究論集』17
- 橋本達也1999「古墳時代前期甲冑の系譜」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
- 藤田和尊1988「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『橿原考古学研究所論集』第八，吉川弘文館
- 松木武彦1985「原始・古代における弓の発達——とくに弭の形態を中心に——」『待兼山論叢』第18号史学篇
- 松木武彦1991「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価——軍事組織の生成に関する一試考——」『考古学研究』第39巻第1号
- 松木武彦1996「前期古墳副葬鏃の成立過程と構成」福永伸哉・杉井健編『雪野山古墳の研究』考察篇，八日市市教育委員会
- 松木武彦1997「岡山県における中期古墳の展開（報告要旨）」『瀬戸内中期古墳社会の変動と要因』古代学協会四国支部第11回大会発表資料，古代学協会四国支部
- 松木武彦1999「古墳時代の武装と戦闘」松木武彦・宇田川武久編『戦いのシステムと対外戦略』（人類にとって戦いとは2），東洋書林
- 村上恭通1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
- 村田幸子1998『打製石剣——大形打製尖頭器——の成立をめぐる問題』『みずほ』第25号